



いよいよ、令和元年も残すところあと一週間あまりとなりました。学校は明日から冬季休業となります。思えば4月に進級や進学をしてそれぞれが新しいステージに立ってから、たくさんの行事や出来事がありました。

上の詩は詩集「にんげんだもの」などで知られる、相田みつをさんの詩です。10月に行われた教育講演会で野田佳彦前総理がこの詩を紹介され、小学校時代のご自分の失敗や、その後の挫折の経験などをお話しされました。その中で、「勝つことは素晴らしい経験だが、負けたときにこそ見える景色がある」「挫折や失敗、ハンディが重要。それが力になる」とのお話は特に子供たちの心に残ったようで、講演後の感想でも「失敗することの不安やマイナスイメージがプラスイメージに変わった。」「失敗しても<そこが出发点>というふうに考えればいいと思った。」「失敗してあきらめてしまった時が本当の失敗だとわかった。」など、負けることや失敗することに対して発想の転換のある感想がたくさんありました。

私も上の詩は以前から知っていたのですが、もともとの詩はかなり長いもので、それを書家である相田みつをさんが短くまとめて、書として作品にしたのがこの詩だということはいつい最近知りました。もとの詩を読んでみると、この詩が若い人たちへのメッセージであることがよくわかります。裏面に掲載してありますので、ぜひご覧ください。

野田さんも講演の中で青春時代の思いや悩み、葛藤、挫折、人との出会いなど、中学生へのエールとなるようなお話をたくさんしてくださいましたが、特に**失敗は誰にでもあるが、その経験を生かすのは自分の気持ち次第。あきらめずに志を高く持ち、成功するまで夢や志を持ち続けることが大切である、**というメッセージは、多くの子供たちの心を揺さぶったと思います。

子供たちは日々様々な経験をし、多くの人と関わりながら成長していきます。今年4月に進級や進学をしてそれぞれが新しいステージに立ってから今日まで、うまくいったことよりも失敗や挫折の方が多かったと感じている者も多いのではないのでしょうか。

今日の集会では、全校生徒に「負けることの意味」や「失敗することの価値」について、私自身が経験してきたことも含めて話しました。野田さんのお話と相田みつをさんの詩とあわせて、少しでも子供たちが考えるきっかけになるといいな、と思っています。

# 受け身

相田みつを

柔道の基本は受身

受身とは投げ飛ばされる練習

人の前で叩きつけられる練習

人の前でころぶ練習

人の前で負ける練習です。

つまり、人の前で失敗をしたり 恥をさらす練習です。

自分のカッコの悪さを多くの人の前で

ぶざまにさらけ出す練習

それが受身です。

柔道の基本では

カッコよく勝つことを教えない

素直にころぶことを教える

いさぎよく負けることを教える

長い人生には

カッコよく勝つことよりも

ぶざまに負けたり

だらしなく恥をさらすことのほうが はるかに多いからです。

だから柔道では 始めに負け方を教える

しかも、本腰を入れて 負けることを教える

その代り

ころんでもすぐ起き上がる 負けてもすぐ立ち直る

それが受身の極意

極意が身につけば達人だ

若者よ 失敗を気にするな

負けるときにはざらりと負けるがいい

口惜しいときには「こんちくしょう！！」

と、正直に叫ぶがいい 弁解なんか一切するな

泣きたいときには 思いきり泣くがいい

やせ我慢などすることはない

その代り

スカッとして泣いて ケロリと止めるんだ

早くから勝つことを覚えるな

負けることをうんと学べ 恥をさらすことにうまくなれ

そして

下積みや下働きの 苦しみをたっぷり体験することだ  
体験したものは身につく

身についたもの一 それはほんものだ

若者よ

頭と体のやわらかいうちに 受身をうんと習っておけ  
受身さえ身につけておけば

何回失敗しても

すぐ立ち直ることができるから……

そして

負け方や受身の ほんとうに身についた人間が  
世の中の悲しみや苦しみに耐えて

ひと(他人)の胸の痛みを 心の底から理解できる  
やさしい暖かい人間になれるんです。

そういう悲しみに耐えた 暖かいところの人間のことを  
観音さま、仏さま、と 呼ぶんです。